

516

正しく将官扱であつてはあらんが、蓋し戦後備から
戦争に際し、現役に復したのか、或は運送船の船
長であらうと推せらる。揃ひも揃つて大柄の男はかり
で、既給服の上夜の背帯に白字で大きくPW
(Prisoner of War)と舞々しく記してゐるのか
目立つ。宮川老が通弁として附添ひて居るが、彼
等は自由に笑話を話し得るといふ。

二月廿二日(月)

宮川通弁から直接に聴取した結果、日軍捕虜兵
中の白髪の老人は特務少佐であり、全員凡て士官で
あらう云ふ。尚ほ同一区域に昨日収容された九名
の新らしい Internees は、一名だけがミソウからで、残りは
各地から検査された人々であつて、中には一レストラ
ント就働中、帰国を申出た処、其後二回に亘り取
調へも受けた結果収容の身とあつたのだと云ふ。

スポーケン市の笠井老は今迄の葬儀執りの為の二
名のガート附添の上帰宅を許されぬと滞在の
後昨夜キャンプへ歸つて来り、全員の土産談にて
傳へられる処によれば、同地に在る日軍市民及び
一世/向に於ける風紀は甚だ紊亂し、手の着けな
がらゝ状態だと謂はれる。

今日は Washington Day で米国の所謂 legal
holiday の一つだ。港のポートランドの者々から
同ヶ森と来て見らせにいらるゝが、この供養部

517

創立記念日でもある。

二月^{廿三}日(火)。

一捕虜学校の船として左の標と事実が漏れ付へられた。因に我が捕虜兵は全部~~海兵~~でゐて、ソロモン島と始のオスカ及びエドウェイ方面に於て捕はれの非連に陥つた人々であると言ふ。

捕虜

顛末概要

船の主人は Midway 海戦を航海者であつて、其船空母艦の乗組員であるが、機関部員であり、海戦中鉄板がとけ出し、機関部の天井から鉄火が頭上に落ちて来た。危険此の上である。腹で其の猛烈さが加はり倒れ船底におられ、側面を破り隣室から上甲板へ出ると、一名の戦友とこねふ。同いふ二大爆発と共に艦は沈没し始めた。同いふフオートルを引移つたまま、十七日~~夜~~に飲まず喰はず漂流したつてゐたが、敵手に陥つた時は、皆人事不省の状態であつたと。従つて今日迄数回に亘り、生死の間に終始した者が数名あるが、遂に今度の武運したふとは父に収容の身になつてゐる。尚ほパールハーバー襲撃には日本艦隊は先艦一艦のやを編隊とし、彼の海空艦隊と敢りゐるので、全艦隊生還を期せし、決死的の大撃撃だつたのか、全艦隊無事帰還したので、豫期以上の戦果であつたと。又此記母艦も亦多くの艦隊を撃つたもののたが、